

<交流学級児童に「共に学ぶ」素地であるコミュニケーションスキルを育成するために>

1 ねらい

○学級内の児童だけでなく、特別支援学級の児童の思いや考えを確かめながら活動を進め、同級生として接することができるコミュニケーションスキルを育成する。

2 手立て

(1) 「友達と関わる力」「自分の考えを伝える力」「相手の気持ちを考える力」「みんなでやる力」「自己有用感」（学級評価では「学級有用感」）の5項目のアンケート（通称：レベルアップアンケート）を定期的に自己評価と学級評価の両面で実施し、自分や学級のコミュニケーション力を振り返る場や学級の重点目標を設定していく。

※(1)と同じアンケートを学級評価として担任（交流学級担任と特別支援学級担任）が行い、学級集団状況を把握すると共に、児童が評価する学級評価との差異を確認し、指導に生かす。

※アンケート結果を踏まえ、教員が教科学習、特別活動、学校行事、児童会活動等の際に、強みを生かしながら弱みを補う場の設定や支援を行う。

※レベルアップアンケートは、8月、10月、12月、2月に実施予定。

(2) 交流学級での話し合いの学習時には、分かりやすい約束を設定し、円滑な話し合いを促す。

◎話し合う時の約束の例

<6月「総合的な学習」の学習時>

- ①一人一人の意見を聞く。
- ②困ったときは、グループの友達や先生に相談する。
- ③集中できない友達がいる時には、「どうしたの？」と声を掛ける。

<11月「理科」の学習時>

- ①一人一人に考えや意見を聞く。
- ②友達が意見を述べている時には、うなずいて聞く。
- ③疑問点は、話を聞いた後に質問する。

(3) みんなのいいところ探し（自己有用感向上に向けた取り組み9月～11月）

- ・いいところを発表される児童の順番を決める。
- ・給食時に順番にあたった友達のいいところを考える。
- ・給食後にその友達のいいところを発表する。

※特別支援学級児童も交流学級児童にいいところを発表してもらった。

(4) 今日のいい人発表（自己有用感向上に向けた取り組み12月～）

帰りの会で、一日の学級生活の中で、いいことをしてくれた人をその内容と名前を発表し合う。

3 成果と課題

(1)について

レベルアップアンケートを自己評価と学級評価に分けたことで、自己の振り返りや学級集団としての振り返りがしやすく、自己目標や学級目標を設定しやすかった。また、「友達と関わる力」「自分の考えを伝える力」「相手の気持ちを考える力」「みんなでやる力」「自己有用感(学級有用感)」と項目を分けたことで、項目ごとの評価が分かりやすく、児童にとって意識化しやすいものであった。児童が意識化することで行動の変容が見られたり、担任もその観点で学級全体を見取り、指導・支援に生かしたりすることができた。そのため、「相手の気持ちを考える力」や「みんなでやる力」の項目において、児童の学級内の友達（特別支援学級児童も含む）との関わり方に思いやりや認め合いの行動が多く見られるようになった。課題としては、数値が良ければ良いということではなく、教員が児童のコミュニケーション状態を見取り適切な評価を与えることが必要である。また、児童の評価規準に個人差が出てしまうため、繰り返し行うことでその評価規準を確認していくことも必要である。

(2)について

話し合いの約束を設けたことで、今までリーダー的な児童の意見や考えが何となくグループの意見となっていたものが、一人一人の意見を聞いてから考えることが出来るようになった。また、高学年としては、約束の内容がもの足りないものとなってしまった。特別支援学級の児童にとって分かりやすい約束だったため、約束を意識して活動する姿が見られた。また、「うなずく」や「最後まで話を聞く」という基本的なことを確認できたことは、児童にとって聞いてもらえる安心感や考えを伝え合う楽しさを体感できたようだった。

(3)及び(4)について

8月のレベルアップアンケートで「自己有用感」の数値が低いことが分かったため、児童の「自己有用感」を高めるために、「いいところ探し」の後に、「いい人発表」を継続してきた。「いいところ探し」では、初めは、友達にいいところを発表してもらうことを恥ずかしがっていた子供たちも、自分の順番が近付くと不安と期待で複雑な気持ちになっていた。いざ、発表してもらうと、照れた笑顔を見せて満足げな様子が見られ、アンケートでも、「自己有用感」の数値の向上が見られた。

「いいところ探し」が全員終わった後に、「いい人発表」を行ったことで、互いにいいところを認め合う学級の雰囲気浸透してきた。しかし、「いい人発表」では、同じ児童が発表される傾向があったので、他の児童のいいところを見付けられるように声掛けをしてきた。